読者の皆様へ

月刊「ほとけの子」編集委員長
若盛　正城

大自然が生き生きと躍動し、木々の緑や花々のみずみずしいエネルギーの中、笑顔とやさしい保護者に守られ育てられてきた子ども達のご入園、ご進級に心よりお祝い申し上げます。

月刊「ほとけの子」は長きにわたり多くの方々のご支援をいただき、おかげ様で平成26年3月号をもって50周年を迎えることができました。改めて感謝申し上げます。

この月刊「ほとけの子」は、(公社) 日本仏教保育協会の願う「いかせいのち」(生命尊重) にご賛同いただいている仏保園のご住職様や保育者を通して、保護者の皆様をはじめ多くの方々に「仏様に見守られながら、全ての命あるものを大切にし、共に守り合い、助け合い、感謝する心を身に付けていくことの大切さ」を伝える情報紙として発行し続けました。

そこで、この50年を振り返りながら、読者の皆様により内容を活かしていただけるよう、2つのコーナーの役割を工夫いたしました。

1　従来までの「特集」のコーナーを「心の華」という温かな名称に改めます。内容は従来までの「花まつり・お悟り・お涅槃」の3大仏期をはじめ、その時々に合った子育てや社会事象に関する大切な視点を「心の華」としてご紹介いたします。

2　「子どもに学ぶ子育てのヒント」のコーナーを新設いたしました。こちらは1年間を通してお読みいただき、実践していただくことで、「子どもに愛される賢い親になる」ことを目指します。

今、若者の読書離れが問題となっていますが、「ほとけの子」を願い育てている読者の皆様には、ますます温かな心が身に付いていかれるよう願っておりますし、必ずや親子の絆が深まっていくことを期待して取り組んでまいりますので、ご理解とご協力の程、改めてお願い申し上げます。

心の華

花まつり
たのしい花まつり

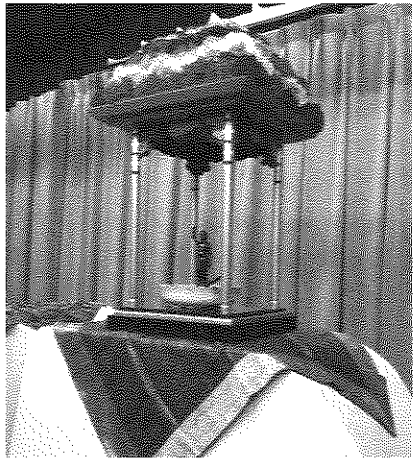
東京・光輪幼稚園園長
髙輪　真澄

私の園では、毎年4月8日に「はなまつり入園式」を行っています。ホールに新入園児と在園生、並びに新入園児の保護者の方が集まり、みんなで「おまいりのうた」や「こどものはなまつり」を歌います。前園長の手作りの白象の上には花御堂が置かれ、天と地を指したお釈迦さまに、代表園児が甘茶をかけてお参りします。園長から新入園のお祝いとお釈迦さまの誕生日の話があり、式は終わります。

式後に園児はみんな誕生仏に甘茶をかけ、甘

茶を飲んで「あまーい」と歓喜の声を上げています。この思い出が、大きくなってもずっと忘れずに残っていると聞いたことがあります。それを聞いた私は「やった」と歓喜の声を上げました。実は、全国のいろいろな場所で、様々な形でこの集いが開かれています。園で、寺で、商店街で、歌ったり踊ったりパレードしたり托鉢したり。

「花まつり」とは、お釈迦さまのお誕生をお祝いする集いです（お釈迦さまは釈尊あるいはブッダと呼ばれますが、ここでは子どもたちになじみの深いこのお名前でお呼びします）。ですから、お釈迦さま（仏さま）がお生まれになったという意味で「仏生会」、あるいはお釈迦さまに甘茶をかけるので「灌仏会」とも呼ばれています（灌とは「そそぎかける」という意味です）。



お釈迦さまの誕生日は太陰暦（旧暦）の4月8日と伝えられています。現在は太陽暦（新暦）になりましたので、新暦の4月8日、または月遅れの5月8日、あるいは旧暦の4月8日（今年は新暦では5月14日）に行われるようになりました。皆さんの園では如何ですか？

お釈迦さまは今からおよそ2500年ほど昔、インドのルンビニーの花園でお生まれになりました。生まれてすぐ7歩あるき、「天上天下唯我独尊　三界皆苦我当安之」と唱えられました。この言葉は「私が、今ここに人としての生命を得ることは素晴らしいことである。それはこの苦しみに満ちた世界に安らぎを与えるからです」という意味だそうです。また、そのとき天からは帝釈天（インドラ神・善神）や竜が、香水でお釈迦さまのお体を洗浴したといわれています。

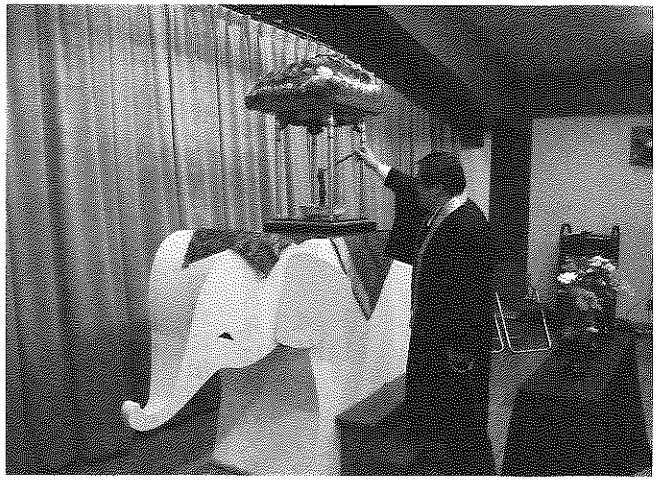
実際は伝えられた話なので諸説ありますが、お釈迦さまは私たちに「いのちの尊さ」を教えてくださった方なのです。この逸話から、花まつりでは花園に見立てた花御堂で、釈迦誕生仏に香水の代わりに甘茶をかけるようになったそうです。

日本では

インドで始まった仏教は、中国・朝鮮半島を経由して、六世紀に日本へ公式に伝わりました。そして7世紀初めの、606年に推古天皇が元興寺（今の奈良の飛鳥寺）で灌仏会を行ったという最初の灌仏会の記録が残されています。そして平安時代の840年、宮中の清涼殿で灌仏会が始まり、やがて全国のお寺へ、そして民間に広まっていきました。灌仏にはもともとは五色の香水をかけていたと言われていますが、江戸時代に入ってから甘茶を用いるようになりました。

甘茶

よく「甘茶って、アマチャヅルのことですか？」とか「紅茶ですか？」と聞かれます。名前や色は似ていますが違います。甘茶は、ユキノシタ科の落葉低木ガクアジサイの変種の「アマチャ」です。この若葉を蒸して揉み、乾燥させたものが「甘茶」です。町の薬局などで売っています。これを煎じてうすくして飲みましょう。砂糖などを入れなくても自然の甘みを感じさせてくれます。その甘さはサッカリンの約2倍だそうです。アマチャには毒性はありませんが、花まつりのとき濃すぎる甘茶を飲んだ児童が集団食中毒を起こした事例があります。濃くして飲むとおなかを壊しますので注意しましょう。厚生労働省は2から3グラムを1リットルの水で煮出すことを推奨しています。



誕生仏

花御堂の中に銅製の鉢が置かれ、甘茶が入れられ、その中央に置かれているのが釈迦誕生仏です。ふつう上半身裸で、右手を上に、左手を下にして立っていらっしゃいます。指先は人差し指が天と地を指しています。あるいは手を開いた状態の仏像もあります。私の好きな誕生仏は、奈良の東大寺の「国宝　誕生釈迦仏立像」（奈良時代・銅製）です。数年前、東京で東大寺展が開催されたときにお会いできました。47センチというその大きさにびっくり。私は小さな誕生仏のイメージしかなかったので意外でした。また、ニコニコして子どもらしいお顔に体型。手を開いて私のことを見ていてくださるお姿は、煩悩で汚れた私の心を優しく包んでくださいました。

「花まつり」という名前

もともとお釈迦さまのお誕生をお祝いする行事なので、「仏生会」や「灌仏会」と言われてきましたが、明治時代になると仏教の新しい動きが始まりました。灌仏会は各地の寺院で続けられていましたが、神仏分離、また、キリスト教の台頭により日本人の心の支えとして仏教の再生運動が展開されました。日本の近代化に力をそそいだ慶應義塾の創設者福沢諭吉は、学生や当時の各宗派の僧侶に働きかけ、「釈尊降誕会」を演説会形式で開催しました。明治25年4月8日に、東京の慶應義塾内の三田演説館（現在重要文化財として保存されている）にて慶應義

塾の小幡篤次郎、真言宗の釈雲照、仏教学者大内青巒、浄土真宗本願寺派の僧侶で学者の島地黙雷らの演説などがあり、多くの人を引きつけました。翌年には大日本仏教青年会がこれを引き継ぎ、帝大（現在の東京大学）講堂にて「釈尊降誕会」が開催されました。演説者は真宗大谷派の僧侶で、仏教の近代化を目指した寺田福寿、大内青巒、真宗大谷派の僧侶で仏教学者の村上専精、哲学者の井上哲次郎、仏教学者の南條文雄、島地黙雷。当時有名な学者や僧侶が宗派の枠を越えて集まりました（『慶應義塾仏教青年会百年史』より）。こうして近代日本においてお釈迦さまの誕生日は、宗派を越えた一大行事に発展しました。そして大正5年、真宗大谷派の僧侶安藤嶺丸が、釈尊降誕会と4月の桜の花見を合わせ「花まつり」という名称を提唱し、その普及活動が始められました。これから「花まつり」という名前が日本中に定着していきました。

私たちは

お釈迦さまは今から2500年も昔に、世の中の苦しみ、いのちの大切さ、幸せ、そして私たちの生きる道を示してくださいました。私たちはお釈迦さまに感謝の気持ちを持って、子どもたちと共に「お釈迦さま、お誕生日おめでとうございます。そしてありがとうございました」と甘茶をかけて、手を合わせていきたいと思います。

高輪　真澄（たかなわ　まさずみ）

東京・善永寺住職（浄土真宗本願寺派）
学校法人善永学園光輪幼稚園園長
武蔵野大学非常勤講師、歴史家

昭和31年生まれ。
昭和57年3月、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。
（公社）日本仏教保育協会常任理事、「こどものくに『ひまわり版』」編集委員長、浄土真宗本願寺派保育連盟副理事長などを務める。